おくのほそ道

旅立ち　―　現代語訳　―

月日は永遠の旅人（のようなもの）であって、来ては去り去っては来る年もまた旅人（のようなもの）である。舟の上で一生を送ったり、馬のくつわを取って老年を迎えたりする者（船頭や馬子など）は、その日その日が旅であって、旅（そのもの）を自分の栖としている。昔の（風雅を愛した）人（の中に）もたくさん旅で死んだ人がいる。自分も、いつの年からか、ちぎれ雲が風に誘われて漂うように、さすらいの旅に出たいという思いが抑えられず、（最近も須磨・明石などの）海辺を旅し、去年の秋、隅田川のほとりのあばら家に（帰り、）蜘蛛の古巣を払いのけて（落ち着き）、そのうち年も暮れ、春になって霞の立ちこめる空の下で白河の関を越えようと、そぞろ神が取りついて心を物狂おしくさせ、（また、）道祖神の招きにもあって落ち着かず、ももひきの破れを繕い、笠のひもを付け替えて、三里に灸を据える（など旅支度にかかる）とすぐに、松島の月のことが何よりも第一に気にかかって、（これまで）住んでいた庵は人に譲り、（とりあえず）杉風の別宅に移るときに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家と詠み（この句を発句とする）表八句を草庵の柱に掛けて置いた。

三月も（押し詰まった）二十七日、明け方の空がおぼろに霞み、月は有明の月で光がもう薄くなっているものの、（遠くには）富士の峰がかすかに見えて、（近くには）上野、谷中の桜の梢（が見えるが、それ）を、またいつ（見ることができる）かと心細い。親しい人々は残らず前の晩から集まって、舟に（一緒に）乗って送ってくれる。千住という所で舟を上がると、前途三千里の（長旅への）思いに胸がいっぱいになって、夢幻のごとき（この世の中で、会うも別れも不定であるが、それでも親しい人々と別れる分かれ道となった千住の）町で、惜別の涙を流すのだった。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

この句を旅日記の初めとして（出発したのだが）、行く道はなかなか進まない。人々は途中に立ち並んで、（私の）後ろ姿の見える限りは（見送ろう）と見送っている様子である。